

○H25 JAがえだまめ選果場を含むセンターの稼働により、選果以後の受け入れ業務が可能となる。それにより生産者は播種から収穫まで『**機械化一貫体系**』が可能となり、**補助事業の利用により面積拡大が図れた。**

○H28 園芸メガ団地整備事業等を活用し、**機械化一貫体系を契機に大規模栽培が始まった。**

○大規模向け作付け計画策定、面積拡大しつつ未収穫圃の無い作付けが可能となった。

・研究会を設立、イベントや**エダマメ加工品の開発等の振興が盛んになった。**

具体的な成果

普及指導員の活動

○JAあきた北農産物流通加工センターが稼働を開始し、生産者の選別調整労力軽減が図られた。



○産地づくりのため、拠点作りをJAと開始、その想定規模から、受け皿をJAとした。

○園芸メガ団地事業を活用し、高性能な収穫機や色彩選別機を導入した大規模生産が始まった。



○規格外品の活用も考慮し、消費者ニーズを増やすための仕組み作りを行った。

面積：H28 157ha→H29 209.6ha

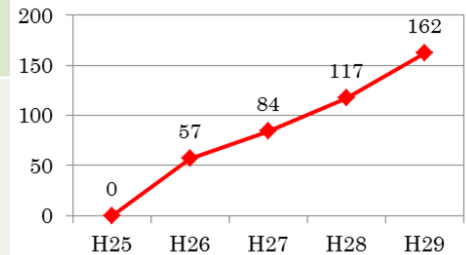
○地元量販店にて大館産えだまめ及びえだまめスイーツの販売促進イベントを開催し、消費拡大を励行した。



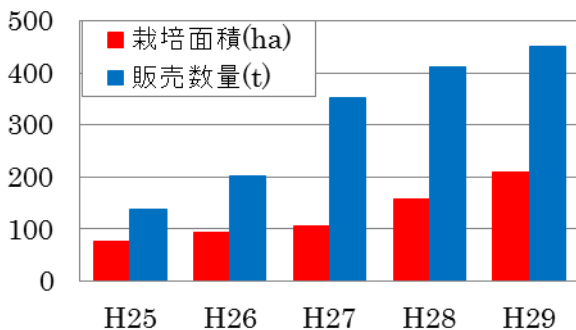
○市、JA、県地域振興局によるPR組織を設立し、加工品の開発等実施、エダマメの6次産業化を牽引している、加工品取扱実績：H28 117t→H29 162

○H25年以降面積と数量は増加

一次加工品の取扱量(t)



栽培面積と販売数量の推移



普及指導員だからできたこと

○農業後継者を中心に既存労力と規模拡大を見据えた各種業導入の相談等を実施、生産者は**無理の無い規模拡大が図られた。**

○加工品の消費拡大を図るため、**消費者側の組織作りも行った。**

農産物流通加工センターの核としたエダマメの生産振興

活動期間：平成26～29年度

1. 取組の背景

H25以前より、大館地区では、転作奨励作目として、エダマメを励行していた。しかし、時間と労力の掛かる選果や出荷調整作業が規模拡大のネックとなり、作付面積は飲み悩んでいた。そこで、H25年にJAあきた北農産物流通加工センターを設置し、生産者からコンテナ荷受けを可能とした。一日の出荷量を増やせることで、生産者は播種から収穫まで「機械化一貫体系」栽培が可能となったため、各種補助事業を活用し規模拡大が図られた。更に、園芸メガ団地整備事業等により一層の規模拡大が進み、産地が優良大規模経営体を育てはじめた。

2. 活動内容

<>

県内屈指のエダマメ産地を目指すため、現場ニーズを汲みつつ、JAの協議を繰り返し、大規模経営体の早期育成と拡充する生産量を請け負える新しい拠点作りを目指す、大規模エダマメ生産構想が出来上がった。

想定規模の大きさから、生産者の希望を取り入れ、現場と消費者ニーズに沿った拠点とすることとし、牽引役となるべく、JAが農産物流通加工センターを設置、県内では新しいエダマメ産地としてスタートした。JA、普及、市により、他産地のエダマメ加工施設等情報を収集した上で、大型冷蔵、冷凍庫を始め、自動選別機等を備え、コールドチェーンに対応できる出荷体制に整備し剥き豆等6次産業化を視野に入れた加工所まで備え、県内でも屈指の装備を誇る施設が完成した。

その施設設置と大規模化への推進活動により、生産者らは安心して園芸メガ団地事業に取り組むこととなり、産地形成が盤石となった。

<試験研究機関との連携>

県農業試験場と連携し、大規模化に伴う、大型収穫機や自動選別機の実証等行い、経営体への早期大規模化が実現した。

また、大規模化に伴う作付け体系、除草等細かな肥培管理技術等も普及と共に確立し、大規模化に伴う品質低下を抑制している。

<JA・市との連携>

JAと市と連携し、6次産業化の芽も育てている。農家のアイデアを出し寄って、一流莢、莢キズ等規格外のエダマメを利用したスイーツ作りと販売促進イベントを実施、消費者へエダマメ産地としてのPR活動と消費拡大と生産者の新たな収入確保出来る手法をPRできた。それにより、学校給食や冷凍食品問屋等からの引き合いも多くなり、市場出荷に加え、加工業務への出荷ルートも確立しつつある。

生産者、消費者双方が楽しめ、生産意識の高揚に繋がっているため、毎年恒例行事として、励行している。

3. 具体的な成果（詳細）

栽培面積は、H25年約90haからH29年には200haへ飛躍的に拡大し、管内に園芸メガ団地実施主体も生まれている。

販売量は、H25年約110tから、機械の大型化等によりH29は400tを超え、大量ロッド確保による市場出荷等有利販売に繋がっている。

一次加工品の取扱量はH25年には無しであったが、施設稼働により、冷凍剥き豆等150tを超えた。

4. 農家等からの評価・コメント

（男鹿園芸メガ団地 新規栽培者 A氏）

園芸メガ団地事業の利用により、作付面積が拡大、地域の高齢農家の受託面積等も増やせたことで、農地の荒廃等も抑えられ、地域雇用の受け皿としても評価をもらっている。また情報の提供や実施試験等により、大型収穫機、やパワーアシストスーツ等先進的な機械を不安なく導入することもでき、現在の経営状況に満足している。今後とも引き続き綿密な指導をお願いしたい。

5. 普及指導員のコメント

（北秋田地域振興局 農業振興普及課 主幹 伊藤征司）

J Aが産地育成の牽引役として自覚できたため、それを後押しする形で産地、市の意見調整を行い、三方の理解を深めていたことで、早期に設備と支援体制は整い、生産者も安心して生産できたと思う。

その結果、産地は新技術の早期浸透と、良品生産への意識が高まり、活気のある産地に変革しつつある。

6. 現状・今後の展開等

産地として勢いはあるものの、労働力の不足が懸念されるため、新たな雇用確保が必要となる。そのため、J A主導の「無料職業紹介所」や軽労化機械の導入を励行し、新しい産地の生産形態を確立する必要がある。その上で、あたらな大規模園芸メガ団地を育成し、生産力を高めていきたい。